62 親族は衣を把(と)って瀚(あか)ふ
63 既に生の苦しみを慰む
64 何ぞ嫌はん、死の遄(すみ)やかならざることを

口語訳

57 長沙の地は低地で湿気が多い。（この地は前漢の賈誼(かぎ)が若くして博士に任ぜられ一年の間に太中大夫まで出世し、そして天子は彼を公卿の位に就けようとしたが、その事を妬まれ卑湿の地、長沙王の太傅に左遷させられたところである）。

58 湘水は深くひろびろとよどみなく流れている。（この川は屈原が懐王の左徒として王の寵愛が厚かったが、上官大夫がこれを妬み讒言したので江南に貶められ、その後、石を抱いて汨羅の川に身を投じて死んだ所である）。

59 一方の私は下降直前（正月七日）に、位は従二位に叙せられたけれど、それも空しい昇進だった。

60 ただ数を揃えるために、一体誰を、私の後釜の右大臣の官に任じたことであろう（実は大納言　源光を右大臣に任じたのである）。

61 ありがたい事に（こうして故人の事蹟を訪ねていると）、旧いなじみの友人が貧しい中から自分の食事を分けて私に食べさせてくれる（ような気持ちになるし）、

62 親族の者達が私の汚れた衣服をつかんで洗ってくれているような心持になるのである。

63 これらの故人の生き様を知るにつけそれによって私の生きる苦悩を慰められているのである。

64 だから、何故早く死なぬのかと呪うほどのこともない。